# ルソーにおける指導者像

三　上　純　子

## Rousseau's leader

Junko MIKAMI

### I　はじめに

ジャン・ジャック＝ルソーは、『学問芸術論』(1750)、『人間不平等起源論』(1755) により、18 世紀フランスの文明と政治社会の道徳的堕落を厳しく批判するところから出発した作家である。彼は、思索の深まりの中で、人間を道徳的であると同時に幸福にするには、どのような教育、どのような小共同体、どのような国家が必要なのかという問いに答えようとする。そして、理想の人間教育を提示した教育論『エミール』(1762)、ユートピア的な小共同体を描いた小説『新エロイーズ』(1761)、あるべき国家の姿を論じた『社会契約論』(1762) を発表した。これらは互いに補い合うような関係の著作であるが、この三つの作品には、それぞれ指導者と呼べるような人物が登場する。本稿では、これらの指導者像を検討し、その共通点と問題点について考えてみたい。ルソーの思索は 2 世紀以上も前になされたものだが、これらの指導者のあり方は、現代の私たちから見てもなお興味深い問題を含んでいると思われるからである。

ではまず、教育論『エミール』における指導者から見てゆこう。

### II　『エミール』における教師ー教育における指導者

#### 1　『エミール』の主題と方法

ルソーは利害の対立が頂点に達している絶対王政の社会に、革命と大変動の時代を予感していた。社会体制が本来あるべきものでないときには、既存の社会秩序や身分に合わせて教育された子供は、身分が変わってしまうと何もできなくなる。そこで必要とされるのは、「自然の秩序」にのっとった人間、すなわち、あらゆる社会的な身分を越えて、人間の本性を失わずに生きる人間の形成なのである。ルソーは、『人間不平等起源論』において、「自然状態」に生きる、「自己愛」と「憐れみ」をそなえた、自由で独立した「自然人」の概念を提示したが、『エミール』では、そのような人間を社会の中で育てるための作業仮説ともいえる人工的な教育環境を作り出し、その中で理念的な人間の発達過程をたどろうとするのである。そのために選ばれた設定が、貴族の家に生まれた子供エミールを一人の教師が育ててゆくというものであった。

#### 2　教師の条件

ところで、エミールの教師を選ぶのは容易いことではない。なぜならば、この教師の仕事は、25 年間生活を共にしながら生徒を導き、「人間の義務」を教えることにあるからだ。ルソーは、

筆者：外国語教育研究センター教授

受理：平成 15 年 9 月 5 日

この仕事は本来父親の義務であり、それができない場合にも、金で雇った人間にまかせるべき仕事ではないと主張する。「教師！ああ、何という崇高な人間だろう・・・実のところ、人間をつくるには、自分が父親であるか、それとも人間以上の者でなければならない。そういう仕事を、あなたがたは平気で金で雇った人間にまかせようとしているのだ[1]。」ここには、子供を捨てた自分自身を含めて、親が育児をすることのなかった同時代の上流階級に対する批判が読みとれる。しかし、もう一つ注目に値するのは、ルソーが、教師という仕事を神聖視していることである。彼は、教師となりうる人間はすでによい教育を受けていなければならないと付け加え、「一人の人間をつくることをあえて企てるには、その人自身が人間として完成していなければならない」（IV, 325）とも述べて、教師に比類のない道徳性を求めるのである。

このような困難を前にして、教育論の中では、著者自身が、教育にたずさわる者に必要とされるすべての条件（年齢、健康状態、知識、才能など）を満たしていると仮定して、エミールを導いてゆくことになる。

### 3　教師の教育方針

では、教師の教育方針はどのようなものだったのだろうか。周知のように、『エミール』で展開された教育は、「消極教育」と呼ばれている。これは、社会の悪から子供の善良さを守る配慮のもとに、自然の歩みにそった、子供の段階的な発達を目指す教育である。そして、このような教育を堕落した社会で実践するためには、一見逆説的だが、指導者の強いリーダーシップが必要とされるのである。

まず第一に、教師は「エミールは（・・・）私にだけ服従しなければならない」（IV, 267）と述べて、独占的な指導体制を要求する。ただし服従といっても、教師は生徒に命令したり権威主義的な態度で何かをさせるわけではない。それでは生徒に反抗心を植え付けるだけであろう。この教師は事物を通して、生徒に子供という状態の弱さを感じさせ、「自分の高慢な頭の上には、自然が人間にくわえる厳しい束縛が課せられている」（IV, 320）という事実を悟らせることによって教育しようとするのである。

さらに、教師は、子供が自分の弱さを武器に大人を引きずり回したりしないように、常に先を見越して子供を支配するという方法をとる。「生徒がいつも自分は主人だと思っていながら、いつもあなたが主人であるようにするがいい。見かけはあくまで自由に見える隷属状態以上に完全な隷属状態はない。こうすれば意志そのものさえとりこにすることができる。何も知らず、何もできず、何も見わけられない哀れな子どもは、あなたの意のままになるのではないか。彼に対しては、その身のまわりにあるものをすべて自由にすることができるのではないか。あなたの好きなように彼の心を動かすことができるのではないか。仕事も遊びも楽しみも苦しみも、すべてあなたの手に握られていながら、彼はそれに気がつかないでいるのではないか。確かに、彼は自分が望むことしかしないだろう。しかし、あなたがさせたいと思っていることしか望まないだろう。あなたが予想していたことを超えては、彼は一歩も踏み出すことはないだろう。何を言おうとしているかあなたが知らないで、彼が口をひらくことはないだろう。」（IV, 362-363）教師は、エミールが、それぞれの時期に取り組むべき課題に邪念なく取り組めるよう、徹底的な管理を行うのである。

このような、教師の子供に対する管理は、時によっては策略の使用にまで及ぶ。子供は、まだ理性が十分に発達していないため、教訓を与えても無意味である。教師は、子供が学ぶべき事柄

を体験によって理解させなければならないのだが、そのときに、策略を用いて効果を高めるのである。例えば、教師は、いつも教師が忙しいときに散歩に行きたいとせがむわがままな子供を一人で散歩に行かせ、あらかじめ頼んでおいた近隣の人々にからかわれたり馬鹿にされたりするようにしておいて、二度と一人で散歩に行くような気まぐれを起こさないようにする(IV, 367-368)。また、磁石の原理を学び始めた子供が、磁石の原理で水上のアヒルを動かす奇術師の術を見破った後、調子に乗りすぎて奇術師に懲らしめられる場面も、教師が生徒の学問への好奇心が虚栄心へと変質しないように仕組んだ芝居なのである(IV, 437-440)。こうして、エミールは多くの知的、道徳的観念を、教師が用意周到に準備したシナリオにしたがって体験的に学んでゆくのである。

## 4　エミールと教師の関係

教師と生徒の関係は、この教育の始まりから、お互いの同意がなければ離れられない運命共同体のようなものと想定されていた。子供は成長と共に、教師に対する親しみを深めてゆく。子供の理解を超えた言葉による詰め込み教育をしない教師は、少年時代のエミールにとっては「仲間」であり、「遊び友だち」(IV, 419) である。

そして、青年期を迎え、宗教教育を終えて理性と感情の目覚める思春期に到達する頃には、エミールは「理性、友情、感謝の念」(IV, 639) によって教師に結びついている。この時期、欲望の目覚めと共に堕落へと向かう危険から生徒を守る必要に迫られた教師は、こうした愛着に訴えながら純血の重要さを説き、生徒自身の意志によって、指導者と生徒の契約を結ぶことに成功するのである。エミールは、「ああ、私の友人、私の保護者、私の先生、あなたの権威をそのままにしておいてください。あなたはそれを捨てようとしているが、今こそそれがあなたの手にあることが、私にとっていちばん必要な時なのです。これまであなたは私が弱いためにそれをもっていたのですが、これからは私の意志によってあなたはそれをもつことになり、それは私にとってそのためいっそう神聖なものになるのです」(IV, 651) と述べて、子供時代の策略による隷属を脱し、自ら望んで教師の意志に服する決意を示す。これに対し、教師は、エミールを幸福にするためにだけ彼の従順さを利用すると約束する。(IV, 653) こうして、結婚や、生涯の伴侶についての重要性を教えられたエミールは，世間に出ても、自分の理想の女性を求めることで純血を守りつつ青春時代を過ごすことができるのである。

『エミール』最終編の第五編は、エミールが妻となるソフィと出会い、恋をはぐくみ、結婚して子供の父となる日までを描いているが、恋人たちの相談相手となり、二人を導いているのは相変わらず教師である。エミールは教師を「父」(IV, 857) と呼び、教師はエミールを「わが子」(IV, 817) と呼ぶに至る。

二人の結婚後、教師はエミールに対し、妻のソフィに指導者の座を譲ると宣言するが、最後の場面で、父親として自分の子供の教育にあたろうとするエミールは、教師に対し、「若い教師たちの先生になってください。私たちに助言をあたえてください。私たちを指導してください。私たちは素直に従うでしょう。生きている限り、私はあなたを必要とするでしょう。今、私の人間としての仕事が始まるとき、私はこれまでのどんなときよりもあなたを必要としている」(IV, 867-868)と述べて、彼らの師弟関係を再確認している。

このように、エミールが大人になるにつれて、エミールと教師の関係は理想の親子関係に近いものとして描かれる。そして、物理的、精神的な自立がめざされたエミールの教育ではあるが、エミールは教師に反抗することもなく、教師への依存的態度は、成人後も続いているような印象

を拭えない。

## III 『新エロイーズ』の家長ヴォルマール－家政における指導者

### 1 『新エロイーズ』のテーマ

次に、家政における指導者を見るために、理想主義的な恋愛を主題とした、書簡体小説『新エロイーズ』に目を転じることにしよう。まず小説の筋を簡単に紹介しておこう。貴族の令嬢ジュリは家庭教師のサン＝プルーと愛し合うようになるが、身分違いの恋はジュリの父の反対にあい、二人は恋の成就をあきらめる。ジュリは父親の恩人である年配の貴族ヴォルマールと結婚し、失意のサン＝プルーは、旅に出る。二児の母となったジュリは夫に過去の恋を告白する。それを聞いたヴォルマールは、寛大な態度で、クラランの領地にサン＝プルーを呼び寄せ、サン＝プルーは一家の友人としてクラランの一員となる。愛と友情に彩られた生活が続くように見えたとき、ジュリは溺れそうになった子供を助けるために水に飛び込み、病に倒れ亡くなる。

ここで取り上げたいのは、作品後半の舞台となるクラランの小共同体である。この自足的なユートピアはたぐいまれな優しい魂の持ち主ジュリの愛情に包まれているが、実質的な管理を行っているのは夫である家長のヴォルマールである。そこで、旧体制下の家における指導者ヴォルマールの家政運営の方法を検討してゆこう。

### 2 クラランの家政

クラランに住むようになった青年サン＝プルーが友人にあててこの共同体の家政について報告した第4部書簡10の冒頭で、「秩序と平和と無垢とが支配し、人間の真の使命にこたえるあらゆるものが、華やかでもなく派手でもなく集まっている簡素で規律正しい家」(II, 441) と呼ばれているこの家父長的大家族において、とりわけ目を引くのは使用人たちの働きぶりである。すべての召使いが心から主人夫婦を慕い、陰ひなたなくよく働く。また使用人同士の仲もよく、外部の悪習にも染まっていないというのだ。どのようにして、このような家政が実現したのだろうか。そのためにはエミールの教育において見られたように、周到な準備がなされ、徹底した管理が行われているのである。

まず、召使いたちは習俗の堕落した町ではなく、田舎から採用される。そして、はじめて奉公にでる子供で「若く体つきがよくて、健康で、顔つきの感じのよい」(II, 445)、協調性の高い者を選ぶ。その上で、召使い同士を互いに世話するようにし向け、主人に対する愛情によって一体となった集団を形成する。ただし、召使い相互の愛着は、主人に奉仕する熱意に従属するものなので、主人に害を及ぼす使用人を見つければ、告発が行われる。使用人たちは、告発を高貴な勇気ある仕事と教えられているのである (II, 463)。

これらの召使いを養成するに当たっては、報酬による仕事の評価が絶えず行われる。これは共同体の富を使用人にも分配する公正なやり方でもある。例えば、長い間奉仕すれば本人たちの利益となるよう、給金は毎年20分の1ずつ上がる。また日雇いの者も含めて、その仕事ぶりは監視人の管理下におかれており、給与とは別に、働きぶりに応じて支払われる報酬や、毎週もっとも勤勉に働いた労働者に与えられる賞与などによって、共同体の利益に競争的に貢献させるシステムが作られているのである (II, 443)。

また男女の親密すぎる関係は災いをもたらすもとなので、使用人たちは、性に応じて別々の仕事、習慣、趣味を与えられている。そして、仕事に忙殺されて、一緒になる時間もないように管

理されている。仕事の後には気晴らしが必要となるが、クラランでは、使用人が外に出かけて酒を飲んだり勝負事をしたりする気が起こらないように、勝負事のための競技場が作られ、日曜ごとに、主人夫妻の懸賞をかけた競技が行われるのである。この娯楽は、使用人を放縦な生活から守り健康にするばかりでなく、名誉心を養い、クラランの共同体への帰一意識を高める役割も果たしている。冬には、主人夫妻の臨席のもと、広間で、近隣の住民たちを招いてのダンスが催される。それは、独身の召使いたちが異性と知り合う機会にもなるのだ。こうした共同体内部の規律が受け入れられない者は、主人夫妻によって暇を出される（II, 449-458）。

このような体制は、主人と使用人の間の強い感情的な結びつきを背景に可能になっていることも指摘しておきたい。サン＝プルーは、慈悲深いジュリの人柄から、「労働者も召使も、あの方に仕えたあらゆる人々は、たとえ唯一日のことであっても、皆あの方の子供になるのです」（II, 444）と感嘆し、主人の一家についても、長年にわたって勤めた従僕が楽な隠居仕事を与えられるより、クラランで生涯を終えたいと申し出た逸話を紹介しつつ、「閣下、これほど深く愛されている主人を父親になぞらえ、その召使たちを子供になぞらえるのは間違っておりましょうか。ごらんの通り、この人々は自らお互いをそうみなしているのです」（II, 447）と報告している。

クラランのユートピア性は、むろん不平等社会の厳しい身分制の上に成立しているものであるが、親子関係に擬せられる感情的な結びつきも含めて、主人たちの巧みな術策により、使用人たちは知らず知らずのうちに道徳性を身につけることができるように工夫されているのである。事実、家長ヴォルマールは、使用人の教育方針を以下のように説き明かしている。「共和国においては、公民は習俗、原理、徳をもって抑えられています。けれども、召使は、金で雇われた者は、拘束をもってする以外にいかにして服従させることができましょう。主人の技術はただこの拘束と強制を快楽もしくは利益のヴェールの下に隠し、彼らが強制されてしている一切のことを自ら欲してしているように思わせるところにあります。」（II, 453）さらに、「命令する人々には十分な節度があり、服従する人々には十分な熱意がありますから、まるで身分の等しい人々が誰一人自分の分担について不平がないように、お互いの間に同じ仕事を割当てることができた場合のようなのです」（II, 548）と報告されている通り、平等感と一体感に満ちた和合を実現した共同体においては、使用人の身分からの逸脱や、主人への反抗は起こりえないのである。

### 3　家長ヴォルマールの人物像

さて、このような家政の指導者であるヴォルマールとは、どのような人物なのだろうか。彼は自分自身について、次のように説明している。「私は生来、穏やかな魂と冷たい心の持主です。（・・・）私の唯一の積極的な行動原理は秩序に対する生来の愛なのでして、運命の戯れと人間の行為とが巧みに組み合わさった協力は、正に絵画における美しいシンメトリのように、あるいは見事に上演された芝居のように、私には面白く思われるのです。もし、私に何か支配的な情熱があるとすれば、それは観察欲です。私は人々の心の中を読むのが好きです。私の心は殆ど私の目をくらまさず、観察に当たっては冷静で、利害心に煩わされず、かつまた長い間の経験から洞察力を与えられていますので、判断において誤ることは滅多にありません。ですから、それだけが私の絶えざる研究における自負心への報酬なのです。というのは，私は役割を演じることを好まず、ただ他人が演じるのを見るのを好むだけですから。私にとって社会は眺めるのが楽しいので、その中に加わるのが楽しいわけではありません。仮に私が自分の存在の性質を変えて、生きた眼になることができるとすれば、喜んでそういう交換をやるでしょう。ですから、私は人間に

対して冷淡ではあっても人間と無縁というわけではありません。彼らから見られたいとは思いませんが、彼らを見たい欲求は感じますし、彼らは私にとって親しい存在ではないが必要な存在なのです。」(II, 490-491) ヴォルマールは、いわば理性を体現したような超人的な人物であり、透徹した観察力によって人々の心を読み、彼らを秩序へと導く支配者なのである。小説中では、ヴォルマールは信仰を持たない無神論者とされているが、ヴォルマールの共同体内部の人々に対するあり方は、造物主の人間に対するあり方に近いとも言える。

実のところ、サン＝プルーは、クラランの家長ヴォルマールのように隠遁した家庭生活を好む家長について、以下のように指摘している。「あらゆる人間の中でただ彼のみが自分自身の幸福の支配者です。なぜなら、彼が恵まれているもの以上には何一つ望まず、あたかも神そのもののように幸福なのですから。あの広大無辺な存在と同じように，彼は自らの所有物を拡大しようとは思わず、最も完全な関係と最も巧妙な指導とによって所有物を真に自分のものにすることを考えます。(・・・) かつては召使は他人であったのに、今では召使いを自分の財産、自分の子供にし、我がものにしているのです。かつては行為に対してしか権利を持たなかったのに、今ではさらにその意志に対しても権利を得ているのです。」(II, 467) クラランの共同体は、ヴォルマールの拡大した自己とも考えられる。完全なる自己充足というあり方も、彼を神に似せたものにしているということを確認しておきたい。

## IV 『社会契約論』における立法者－政治社会における指導者

### 1 『社会契約論』のテーマ

では次に、理想の政治社会を論じた『社会契約論』における指導者に注目してみよう。ルソーは、『人間不平等起源論』において、自己充足的な生を享受していた善良な自然人が、社会状態への移行と共に悪徳を身につけ、ついには専制主義の下、主人に対する奴隷のようなものになってしまうと不平等社会を批判した。そこで『社会契約論』では、本来善良であった人間が、人間の本性である自由、平等の存在様式を失わず、国家を構成する市民となるには、どのような政治社会が望ましいのかという問いに答えようとする。その規範的ともいえる政治社会の基本原理が、社会契約に基づいた人民主権の原理であった。ルソーは人民の社会契約により、主権者が形成され、その主権者が一般意志を行使すると論証する。では、社会契約とはどのようなものであり、どの段階で指導者が必要となるのであろうか。

### 2 社会契約と立法者

ルソーによれば、自然状態から社会状態に移行し、個人的な利害の対立や競争から権力関係が生まれて、人々の間に戦争状態が支配するようになったとき、人間は新たな存在様式を獲得しなければ自分を守ることができなくなる。そこで解決すべき問題は、「各構成員の身体と財産を、共同の力のすべてをあげて守り保護するような、結社の一形態を見出すこと。そうしてそれによって各人が、すべての人々と結びつきながら、しかも自分自身にしか服従せず、以前と同じように自由であること」(III, 360) というものである。ルソーは、この問題を解決するのが社会契約で、その条項はただ一つのことに帰着すると主張する。「各構成員が自分のすべての権利とともに、共同体全体に対して、自分を全面的に譲渡することである。」(III, 360)

したがって、社会契約とは全人民が相互的に結ぶ、結社を作る契約であり、個々人は自らがその一員となるはずの人民の団体と契約することにより、新しい公的人格、主権者を形成すること

になる。この主権者が、一般意志と呼ばれる共同体全体の意志を行使することにより人民主権が実現するのである。一般意志の行為は立法として現れる。人民は自らの意志によって、普遍的・公共的な利益をめざす法に服し、それによって、自己の身体と財産を守ることも可能となる。そのとき、個人の自由にも質的な転換が起こることを忘れてはなるまい。契約以前の自由は、欲望への盲目的な服従の別名にすぎなかった。ルソーは、社会契約を通じて、人間は、一般意志に制約される市民的自由と、自分の課した法律に従う道徳的自由とを手に入れると考える。自然状態において単に善良であった存在は、社会状態では、理性と良心によって他者の利害と自己の利害を調整できる存在となるのである。

さて、このように社会契約においては、人民のみを主権者とし、人民の意志決定のみが法を作るのであるが、ルソーは、「法」についての説明の後、「立法者」という職分について言及する。立法者が必要となるのはなぜであろうか。ルソーは次のように述べている。「目の見えない大衆は、何が自分たちのためになるかを知ることがまれなので、自分が何を望めばよいのかわからないことが多い。このような大衆が、どうやって、体系的な立法のような、あれほど困難な大事業を自ら実行しうるのだろうか。人民は、自ずから、常に幸福を欲する。しかし、人民は、必ずしも常に、自ずから、幸福が何であるかを悟るわけではない。一般意志は常に正しいが、それを導く判断は、常に啓蒙されているとは限らない。一般意志に、対象をあるがままの姿で、時には、あるべき姿で見させなければならない。一般意志に、それが求める正しい道を示し、特殊意志の誘惑から守り、所と時とに注意を向けさせて、目前のはっきりした利益の魅力と遠くに隠れている災いの危険とを比較考量させなければならない。」(III, 380) つまり、大衆は自分たちの望んでいる幸福を十分に理解していないことが多く、その幸福を将来にわたって実現するための判断力にも欠けているというのである。こうして大衆が真に望んでいることを教え、彼らを正しい判断に導く制度を最初に準備する指導者が要請されるのである。

### 3　立法者の特性と困難

では、立法者の資格とはどのようなものなのだろうか。ルソーはまず卓越した知性の必要を説く。「その知性は、人間のすべての情念をよく知っており、しかもそのいずれにも動かされず、我々の性質を知りぬいていながら、それと何らのつながりをもたず、みずからの幸福は我々から独立したものでありながら、我々の幸福のために喜んで心をくだき、最後に、時代の歩みのかなたに栄光を用意しながら、一つの世紀において働き、後の世紀において楽しむことができる、そういう知性でなければなるまい。」(III, 381) 立法者は先に見た家長ヴォルマールのように、人間の本性に対する鋭い洞察をもちながら、自身は人間の弱さから自由であり、公明正大な心と先見の明によって、人民を幸福へと導く人物なのである。また、彼の準備する制度は、社会契約を結んだ諸個人を、公共の利益を個別の利益に優先させることのできる、道徳性を持った人間に変えることをめざしているという意味では、立法者は優れた教育者でもなければならない。ルソーは、このような立法者について、「人々に法を与えるには、神々が必要であろう」(III, 381) と付け加え、立法者の超人的性格を強調している。

以上のように、立法者は、その能力においてまれに見る人物なのだが、ルソーは、さらに、政治体の中でいかなる権力も持たないという点において、その職務は特別だと述べている。立法者は、立法権も持たず、行政機関でもない。これは、どれほど優れた人物であろうと、政治体が彼の個人的な情念に支配されるものとなってはならないからである。立法者の位置は、法や制度を

作るにあたっての助言者というべきものに限られる。ルソーは、このような状況の例として、しばしば外国人が立法者の役割を果たしていたギリシャの都市国家の例を挙げている（III, 382)。

さて、立法者は権力を持たず人民に働きかけねばならないという困難を抱えた存在なのであるが、その職務上、もう一つさけがたい問題に遭遇せざるを得ない。それは、まだ十分に啓蒙されていない形成期の人民に理性の言葉で語り、説得することは難しいという事実である。彼らが立法者の説く公共精神を理解するためには、法律が生まれる前に、彼らが法律によってなるべき存在になっていなければならないというわけである。

こうして、暴力による強制も合理的説得も用いることのできない状況下において、立法者に残された手段は宗教的な権威である。「このような事情から、あらゆる時代を通じて、建国者たちはやむなく、天の助けにたより、彼ら自身の英知を神々のものとしてほめたたえたのである。それは、人民が、自然の法則に従うのと同じように国家の法律に従い、人間の形成と都市国家の形成との中に同じ力の働きを認めて、自由な心で服従し、公共の至福というくびきを素直にうけるようにするためだったのである。」（III, 383）すでに見たエミールの教師が、言葉による説明が役に立たない子供に対して策略を用いたように、立法者は人民を幸福に導くために、宗教的な権威という策略に頼らざるを得ないとも考えられよう。

## Ⅴ　ルソーにおける指導者像に見られる特徴と問題点

### 1　指導者像に見られる特徴

ここで、今まで見てきた指導者像に共通する点をまとめてみよう。まず、彼らはいずれも、知性、道徳性において超人的な人物である。ルソーにおける指導者は常に、指導対象とは能力的にかけ離れた存在として設定されている。さらに、ヴォルマールと使用人における身分の違いや、人民によって構成される共同体の外部にとどまる立法者の立場の特殊性に見られるように、指導者と指導対象は、同じ世界に属しているとは言い難い。彼らの関係は対等のものとはなり得ないのである。こうした条件のもとに、指導者たちは強い指導力を発揮することができるのだ。

指導者の属性の中で最も目立つのは見る力である。それが、指導対象には見えない将来を見通して指導することを可能にしている。そして、指導者の喜びも、また見ることにある。彼らは、道徳的に形成された指導対象が幸福を享受する姿に、自身の作品を認め、演出家、造物主の喜びを覚えるのである。

さらに、ルソー的な指導者たちは、指導対象を道徳的であると同時に幸福な存在に導くという目的のためには、一時的に策略を用いることをも辞さない。また、特に教師と家長の場合に明らかなように、指導者と指導対象の間には、親子関係に擬せられる強い感情的絆が存在する。このような感情的な絆こそが、指導者による指導対象の幸福を願う気持ちの保証となり、指導者が場合によって術策を弄することを正当化しているように思われる。

### 2　指導原理に見られる悪魔性

こうした指導者のあり方について、これをきわめて陰険な人間支配のあり方だと見る研究者もいる。中川久定氏は、これらの指導者のあり方には次のような構造が見られると述べている。

(1)下位意志（生徒、召使い、人民）に対する上位意志（教師、家長、立法者）の不可視性。
(2)下位意志に対する上位意志の善意。
(3)見せかけの自由を与えられた下位意志の、上位意志に対する絶対的隷属[2]。

中川氏はルソーのさまざまな作品の分析から、この二重意志の構造がルソーの思想を貫く基本構造であることを跡づけた上、この構造と、ミシェル・フーコーが『監視と懲罰』(1975)で紹介した、ジェレミー・ベンサム発案の「一望監視監獄」の構造との類似を指摘している。そして、「一般意志」の原則と「『機械的に反応する従順さ』を目指す訓育」の結合に近代国家の悪魔性を見たフーコーの議論をふまえて[3]、「すべての個人を、外面と内面の両面から、完全に規制[4]」するルソー的な教育方法に、この悪魔性の起源を見る見方を提示している。

このような解釈は、ルソーが人間の道徳的な自由をめざしながら、その過程においては自由を奪う管理教育に頼っていることに対する、最も厳しい批判と言えよう。ただ逆説的ではあるが、ルソーにおける管理教育の徹底性は、ルソーの道徳的理想主義そのものにその根をもっているように思われる。宗教改革の都ジュネーヴに時計職人の息子として生まれ育ったルソーは、市民階級の愛国心とカルヴィニストの規律と信仰心に包まれた幼少期を過ごした。ルソーは、この倫理的な風土にはぐくまれた道徳的な人間への強い憧れを終生持ち続け[5]、資本主義の勃興とともに、宗教が人々の道徳的な基盤としての力を失いつつあったフランスで、道徳的な人間形成の理論を構想したのである。さらに、ある識字率の調査によれば、17 世紀末にフランスの男女の 8 割弱、18 世紀末でも 6 割強が字が読めない状況だったという[6]。いわば道徳的危機の時代に、このような民衆を公徳心をもった存在に変えるための、卓越した指導性であり、徹底した管理による指導だったのではあるまいか。

しかし、今日のわれわれから見ると、ルソー的な指導者像やその指導原理に不安を抱かせる点がないとは言えない。最後に、中川氏の指摘にも関連するいくつかの問題点を指摘しておきたい。

### 3　指導者像、指導原理における問題点

まず第一に、指導者に見られる無謬性が挙げられる。指導者の超人的な知性と指導対象を幸福にしたいという意志が前提とはいえ、このような指導者の位置づけには、独裁の危険が伴う。また、ここには、教育の最終的な目標である、指導対象が指導者を超える契機は見出せない。

第二に、ルソー的な指導者の先見の明による、合理的な方法は、指導対象を過保護にしてしまうのではないかという疑問が生じる。例えば、先に見た、エミールの虚栄心の発達を防止するために仕組まれた、アヒルを操る手品師のエピソードであるが、これは、子供が現実に出会うかもしれない、もっと辛い体験を先取りして、ショックの少ない形にして与えてやるという方法である。ちょうど、予防注射のようなものであるが、教師による管理が行き届き、常に予防注射によって守られ続けた子供は、果たして、現実に放り込まれたときに、自分で生きてゆけるのだろうかという心配が残る。これはクラランの共同体の召使いについても同様で、こちらの方は、身分社会の論理のためにもっと極端な形をとっているとも言える。クラランの使用人たちは、自分で自分を律することを学ぶ人間と期待されていないからである。彼らの道徳性は、クラランを離れては保てないもののように思われる。言い換えれば、指導対象は、指導者に依存し続けるおそれがあるのだ。

第三に、ルソー的な指導者のユートピア（教育、小共同体、国家）では、指導者との同一性が重視され、異質の分子が入り込む隙がない点である。指導者と指導対象との間には、葛藤や反抗といった対立関係が存在しない。実のところ、指導対象と対等の関係にない指導者は、指導される者の心を常に掌握し、その行動が予測可能なので、指導者にとっては、生徒も、使用人も、人民も他者とは言えない。他者とは、自分には理解できない面をもっており、場合によっては、敵

対しつつ共生する道を探ってゆかねばならない相手だからである。教育空間から、異質の者を排除し、均質で透明な世界を作ってゆくと一見居心地がよさそうに見えるが、どこまで行っても自分しかいない、意外性、発展性のない閉じた世界になってしまう可能性がある。そういう意味で、ルソー的な指導者には、指導対象である自分の作品の中に自分自身を認めて、指導者の幸福に浸るナルシシズムが存在するように感じられる。

ルソーは道徳的な憧れから、神にも比せられる指導者像を生み出した。彼らの卓越した指導力によって導かれるユートピアは今でも魅力を失ってはいない。しかし、そのユートピアはまた、指導者と指導対象との間の、理想的に見える関係がもちうる危険性について、私たちに反省を促してはいないだろうか。

## 注

1 Jean-Jacques Rousseau, *Émile*, OEuvres complètes IV, Paris, Gallimard, 《 Bibliothèque de la Pléiade 》, 1969, p.263. 以下ルソーの作品については、上記のルソー全集（1959-1995.全５巻）から引用し、本文中に全集の巻数とページ数を示す。訳文については白水社版の『ルソー全集』及び岩波文庫版を参照させていただいたうえ、論者の都合によって変更した部分もあることをお断わりしておく。

2 『転倒の島　18 世紀フランス文学史の諸断面』、岩波書店、2002、103 ページ。この「二重意志」を巡る論考は、以下の著作にも収められている。Hisayasu Nakagawa, *Des lumières et du comparatisme, Un regard japonais sur le XVIII^e siècle*, Paris, Presses Universitaires de France, 1992, pp.135-165.

3 同書、131 ページ。

4 同書、145 ページ。

5 ルソーにとってのジュネーヴの重要性については、小林善彦、『誇り高き市民　ルソーになったジャン＝ジャック』、岩波書店、2001 を参照。

6 木村尚三郎、志垣嘉夫編、『概説フランス史』、有斐閣、1982、280 ページ。

## 参考文献

*Dictionnaire de Jean-Jacques Rousseau*, publié sous la direction de Raymond Trousson et Frédéric S.Eigeldinger, Paris, Honoré champion, 1996.

De Negroni, Barbara, 《 Éducation privée et éducation publique: la politique du précepteur et la pédagogie du législateur 》, dans *Rousseau, l'Émile et la Révolution*, Paris, Universitas, 1992, pp.119-134.

Gagnebin, Bernard, 《 Le rôle du législateur dans les conceptions politiques de Rousseau 》, dans *Études sur le Contrat social de Jean-Jacques Rousseau*, Paris, Les Belles lettres, (Publication de l'Université de Dijon), 1964, pp.277-290.

Nakagawa, Hisayasu, 《 Le législateur chez Rousseau et Diderot 》, dans *Jean-Jacques Rousseau, politique et nation*, Paris, Honoré champion, 2001, pp.109-115.

Foucault, Michèl, *Surveiller et punir-Naissance de la prison*, Paris, Gallimard, 1975.(邦訳、ミシェル・フーコー、『監獄の誕生—監視と処罰』、田村俶訳、新潮社、1977。)

Polin, Raymond, *La politique de la solitude*, Paris, Éditions Sirey, 1971.（邦訳、レイモン・ポラン、『孤独の政治学　ルソーの政治哲学試論』、水波朗他訳、九州大学出版会、1982。）

Roussel, Jean, 《 La liberté d'Émile et la ruse du gouverneur 》, dans *Approches des Lumières: mélanges offerts à Jean Fabre*, Paris, Klincksieck, 1974, pp.431-438.

Starobinski, Jean, *Jean-Jacques Rousseau la transparence et l'obstacle,* Paris, Gallimard, 1971.(邦訳、ジャン・スタロバンスキー、『J.-J.ルソー　透明と障害』、松本勤訳、思索社、1973。)
坂倉裕治、『ルソーの教育思想』、風間書房、1998。
小笠原弘親他、『ルソー　社会契約論入門』、有斐閣新書、1978。
木村尚三郎、志垣嘉夫編、『概説フランス史』、有斐閣、1982。
中川久定、『甦るルソー　深層の読解』、岩波書店、1983。
中川久定、『転倒の島　18 世紀フランス文学史の諸断面』、岩波書店、2002。
水林章、『幸福への意志』、みすず書房、1994。
吉沢昇他、『ルソー　エミール入門』、有斐閣新書、1978。
吉澤昇他、『ルソー　著作と思想』、有斐閣新書、1979。
リュディガー・ザフランスキー、『悪あるいは自由のドラマ』、山本尤訳、法政大学出版局、1999。